

マルクス=エンゲルス選集

第八冊

マルクス＝エンゲルス選集

ソ同盟共産党中央委員会付属
M・E・L・S 研究所 編
M・L 主義 研究所 訳

第 八 冊

大 月 書 店

昭和30年12月15日 第1刷発行

検・印
いたし
ません

訳者	マルクス＝レーニン
発行者	主義研究所
印刷者	小林直衛 山田博

発行所 大月書店

東京都文京区本郷1の15
電話(92)3091・7887
振替 東京 16387

目次 第八冊

ルードウィヒ・フォイエルバッハと	
ドイツ古典哲学の終結（エンゲルス）	一
序言	二
一	五
二	二二
三	三八
四	五一
フォイエルバッハにかんするテーゼ（エンゲルス）	八三
『一八四四年のイギリスにおける労働者階級 の状態』序文（エンゲルス）	八九
フランスとドイツの農民問題（エンゲルス）	一二七

手

紙（マルクスⅡエンゲルス）

一		110
二		138
紙（マルクスⅡエンゲルス）		153
マルクスからベ・ヴェ・アンネンコフへ		154
マルクスからJ・ワイデマイヤーへ		174
マルクスからエンゲルスへ		175
マルクスからエンゲルスへ		177
マルクスからL・クーゲルマンへ		179
マルクスからL・クーゲルマンへ		187
マルクスからL・クーゲルマンへ		190
マルクスからL・クーゲルマンへ		193
マルクスからL・クーゲルマンへ		195
マルクスからF・ボルテへ		197
エンゲルスからT・クノーへ		101
エンゲルスからA・ペーベルへ		112
エンゲルスからF・A・ゾルゲへ		119

	マルクスとエンゲルスからA・ペーベル、W・リープク	
	ネヒト、W・ブラツケその他へ（『回状』）	三二
	エンゲルスからK・シュミットへ	三三
	エンゲルスからJ・ブロッホへ	三八
	エンゲルスからK・シュミットへ	三九
	エンゲルスからF・メーリングへ	四〇
	エンゲルスからエヌ・エフ・ダニエルソンへ	四一
	エンゲルスからH・シュタルケンブルグへ	四二
付録	フリードリヒ・エンゲルス伝	四三
解説		四七
人名注		
事項注		
事項索引		

ルードウィヒ・フォイエルバッハと
ドイツ古典哲学の終結

フリードリヒ・エンゲルス

序　　言

カール・マルクスは、一八五九年にベルリンで出版した『経済学批判』の序文〔本書第三冊〕のなかで、われわれ二人が一八四五年にブリュッセルで「ドイツ哲学のイデオロギー的見解にたいするわれわれの見解の」——おもにマルクスによって仕上げられた唯物論的歴史観〔唯物史観〕の——「対立的見解を共同でまとめあげること、じつはわれわれの以前の哲学的信念のかたをつける」ことに、どのようにとりかかったかをのべている。そして「この決心は、ヘーゲル以後の哲学の批判という形で実行された。ぶあつな八つ折り判二冊⁽¹⁾からなるその手稿がその出版地のウェストファーレンにとどいてから、だいたいぶたつて、われわれは、事情がかわったので出版できなくなった、という通知をうけとった。自分自身に問題をあきらかにするといわれわれのおもな目的はとげられていただけに、われわれは、よろこんでその手稿をねずみの歯の批判にゆだねたのであった」と。

それ以来、われわれのどちらにもこの題目にたちかえる機会はあたえられないで、四〇年をこえる歳月がながれ、そしてマルクスは死んでしまった。ヘーゲルにたいするわれわれの關係については、われわれの考えをあちこちで発表した、しかしどこでも包括的な関連ではのべな

かった。フォイエルバッハはやはり、多くの点で、ヘーゲル哲学とわれわれの見解との中間項となつてゐるが、このフォイエルバッハには、われわれはついぞふたたびたちかえらなかつた。かれこれするうちに、マルクスの世界観は、はるかにドイツの国境をこえ、ヨーロッパの境界をこえて、世界のすべての開化した国語のなかに、その代表者を見いだした。他方において、ドイツ古典哲学は、外国で、ことにイギリスやスカンディナヴィアで、ある種の再生を経験しており、そしてドイツでさえ、その諸大学で哲学の名のもとにさじ飲みされている折衷的な乞食スープ⁽³⁾には、人々はあきあきしてきたものである。

このような事情のもとでは、ヘーゲル哲学にたいするわれわれの関係、われわれがこの哲学から出発し、そして分離したしだい、についての手短かなまとまった叙述がますます必要であるように私には思えた。おなじように私には、われわれの疾風怒濤時代に他のすべてのヘーゲル以後の哲学者たちにまさつてフォイエルバッハが、われわれにあたえた影響を十分に承認することが、われわれがまだ決済しないでいる信用借りであるように思えた。だから私は、『ノイエ・ツァイト』⁽⁴⁾の編集部が、フォイエルバッハについてのシュタルケの本を批評するようにと私に申しこんだとき、よろこんでその機会をとらえた。私のこの労作は、同誌の一八八六年第四号と第五号とに発表されたが、いまここにそれを校訂して単行本として公刊する。

私は、これを印刷にまわすまえに、一八四五年から四六年にわたつて書いたふるい手稿をふ

たたびとりだして、目をとおしてみた。そのフォイエルバッハにかんする節は完成していない。できあがっている部分は、唯物論的歴史観を説明したものであるが、この説明は、経済史についてそのころのわれわれの知識がまだどんなに不完全なものであったかを証明するにすぎない。フォイエルバッハの学説そのものの批判はそこにはない。したがって、当面の目的には、このふるい手稿は役にたたなかった。それにひきかえ、私は、マルクスの一冊のふるいノート
のなかに、フォイエルバッハにかんする一一のテーゼ——本書に付録として印刷してある——
を見いだした。それは、のちに仕上げるための覚え書であり、あわただしく書きつけられたものであって、印刷にするつもりのもものでは絶対にならない。けれどもそれは、新しい世界観の天才的な萌芽がおさめられている最初の記録として、はかり知れないほど貴重なものである。

ロンドン 一八八八年二月二日

フリードリヒ・エンゲルス

この本は、われわれを一つの時期につれもどす。それは、時間でいうと、いまからたっぶり一代まえなのであるが、ドイツの今日の人々には、すでにまるまる一世紀も昔のことであるかのように縁遠いものになっている。その時期というのは、じつにドイツが一八四八年の革命のための準備をしていた時期であった。そして、それ以来、われわれのところでおこるものごとはすべて、この一八四八年の続きにすぎず、この革命の遺言執行にほかならない。

* 哲学博士C・N・シュタルケ『ルードウィヒ・フォイエルバッハ』、シュトゥットガルト、一八八五年、ソエルディナント・エンケ書店。

一八世紀のフランスにおいてとおなじように、一九世紀のドイツでもまた、哲学の革命が政治的崩壊を誘導した。しかしこれが、フランスとドイツとは、なんというちがった外見を呈したことであろう！ すべての公認の学問にたいし、教会にたいし、しばしばまた国家にたいしても、公然と闘争したフランス人たち。彼らの書きものは国境のかなた、オランダまたはイギリスで出版され、そして彼ら自身は、しばしば、あやうくパスティーユ監獄にぶちこまれるところであった。これにひきかえ、ドイツ人たち、彼らは、国家から任命された青年たちの教

師たる教授連中であり、彼らの書きものは公認の教科書とされ、さらにその全發展を完結した体系、すなわちヘーゲルの体系は、ほとんどプロシア王国の国定哲学の位にまでもまつりあげられたのであった！　ところで、このような教授連中のうしろに、彼らのもの知りぶったあいまいな言葉のうらに、その重苦しくて退屈な文句のあいだに、はたして革命がひそんでいたのだろうか？　いったい、当時革命の代表者と見なされていた人々、自由主義者たちは、まさしく、頭を混乱させるこうした哲学のもっとも激しい反対者ではなかったか？　だが、「領邦」諸政府も自由主義者もみることのできなかったものを、すでに一八三三年にすくなくもある一人の男がみていた、——その男の名はほかならぬハインリヒ・ハイネであった。

一つの例をとろう。哲学的諸命題のうち、「現実的なものはすべて合理的であり、合理的なものはすべて現実的である」というヘーゲルの有名な命題ほどにはなはだしく、目先のみえない諸政府からは感謝を、だがおなじように目先のみえない自由主義者からは憤怒を、まねいた命題はなかった。なぜなら、それは、あきらかに、現存しているすべてを神聖化する宣言であり、専制政治、警察国家、専断な裁判、検閲への哲学的祝福である、とみえたからである。それを、そうフリードリヒ・ウィルヘルム三世も解したし、彼の臣民もそう解した。けれども、ヘーゲルの考えでは、けっして、現存しているものすべてが、いきなりそのまま現実的でもあるというのではなかった。彼にあっては、現実性という属性は、同時に必然的であるものにだけ属

するのであった。「ものの」現実性は、その発展過程において、みずからを必然性としてしめす。」だから、政府のとるある任意の措置——ヘーゲルみずからのひいている例では「ある租税制度」——も、ヘーゲルにあつては、すでにそれだけでいきなり現実的であるというのではけつしてない。しかし、必然的であるものは、結局においては、合理的でもあることがしめされてくる、というのであつて、これを当時のプロシア国家にあてはめると、ヘーゲルの命題の意味するところは、だから、こういうことにすぎない、——すなわち、この国家は、それが必然的であるかぎり合理的であり、理性になつてゐる。それなのに、もしこの国家が、われわれに劣悪なものと思われながら、このように劣悪であるにもかかわらず、存在しつづけるならば政府の劣悪性は、臣民のそれに照応する劣悪性によつて正当とされ、説明される。その当時のプロシア人は、自分たちにふさわしい政府をもつていたわけである。

ところで、現実的であるということとは、ヘーゲルによると、あるあたえられた社会的または政治的な状態について、いつでも、どんな事情のもとでもいえる属性ではけつしてない。その反対である。ローマ共和国は現実的であつた。けれども、それをおしのけるローマ帝国もまた現実的であつた。フランスの君主制は、一七八九年には非現実的なものとなつてゐた。すなわち、それは、ヘーゲルがいつも無上の感激をもつて語つてゐるあの大革命によつてほろぼされなければならなかつたほどに、まったくその必然性をうしない、非合理的になつてゐたのであ

る。だからここでは、君主制は非現実的なものであり、革命が現実的なものであった。このように、さきには現実的であったもののいっさいが、発展の過程において非現実的となり、みずからの必然性を、存在権を、合理性を、うしなってしまうのである。死んでゆく現実的なものかわりに、新しい、生命力のある現実的なものが、あらわれてくる、——ふりいものが反抗せずに死んでゆくほど思慮ぶかい場合には平和的に、だがふるいものがこうした必然性にさからう場合には暴力的に。このように、ヘーゲルの命題は、ヘーゲルの弁証法そのものによって、その反対の命題に転化する、——すなわち、およそ人間の歴史の領域で現実的であるものはずべて、時とともに非合理的なものとなる。だから、それは、その本来のさだめからしてすでに非合理的なものであり、もともと非合理性を負わされているのである。それから、およそ人間の頭脳のなかで合理的であるものはすべて、たとえそれが現存する見かけのうえの現実性などんなにひどく矛盾していようと、現実的なものとなるようにさだまっているのである。現実的なものはすべて合理的であるという命題は、ヘーゲルの思维方法のあらゆる規則にしたがって、他の命題に解消してしまふ、——すなわち、現存しているものはすべて滅亡するにあたいするという命題に。

しかしながら、ヘーゲル哲学（われわれはここではカント以来の全運動の完結としてのヘーゲル哲学にかぎらなければならぬ）の真の意義と革命的性格は、じつにこの哲学が、人間の

思惟と行為とのあらゆる成果の窮極的妥当性にたいして、一挙にとどめをさしたところにある。哲学が認識しなければならぬ真理は、ヘーゲルにあっては、もはや、一度見いだされたらあとは暗記しておきさえすればいいというような、できあがった教条的^{ドグマ}な命題のよせあつめではなかった。真理は、いまや、認識の過程そのもののなかに、科学のながい歴史的発展のなかにあった。この科学は、認識のより低い段階からより高い段階へのぼってゆくのであるが、そうしても、いわゆる絶対的真理を見いだすことによって、もうそれからさきにはすすもうにもすすめず、手をこまねいて、得られた絶対的真理をおどろきながめているほかもうなにもすることなないというような点に到達することは決してないのである。そして哲学的認識の分野においてとおなじように、他のどんな認識の分野でも、また実践的行為の分野でも、そうなのである。認識と同様に、歴史もまた、人類のある完全な理想状態のうちに完結点を見いださうというようなものではない。完全な社会とか、完全な「国家」とかいふものは、想像のなかにしか存在できないものである。そうではなく、つぎつぎにつづいてでてくる歴史的状態はすべて、低いものから高いものへとすすんでゆく人間社会のかぎりない発展の途上におけるたんなる経過的な段階にすぎない。いずれの段階も必然的であり、したがって、その段階を生じさせた時代と条件とにたいしては、正当のものである。けれども、いずれの段階も、その段階自身の胎内にしだいに発達してくる新しい、より高い条件にたいしては、根拠のないものとなり、

正当でないものとなる。それは、一つの、より高い段階に席をゆずらなければならぬ。だが、ついで、このより高い段階自身にまた衰微滅亡する順番がくる。ブルジョアジーが、大工業と競争と世界市場とによって、安定した、年月をへて尊くなつたといったの制度を實踐的に解消させるように、この弁証法的哲学は、窮極妥当的・絶対的な真理とか、またそれに対応する人類の絶対的状态とかいう考えをみな解消させてしまふ。この哲学のまへには、窮極妥当的なもの、絶対的なもの、神聖なものは、なに一つ存在しない。この哲学は、いっさいにつき、いっさいにおいて、その消滅するものであることをしめす。そして、この哲学のまへには、生成と消滅との不斷の過程、低いものから高いものへのかぎりない上昇の不斷の過程より以外には、なにものも存在しない。そして、この過程の、思惟する脳髓における、たんなる反映が、すなわちこの哲学なのである。この哲学も、なるほど一つの保守的な側面をもつてはいる、すなわち、一定の認識の段階と社会の段階とがそれぞれの時代と事情とにたいしては正当なものであることをみとめている。だが、ただそれだけである。この見方の保守性は相対的であり、この見方の革命的な性格は絶対的である、——これは、この見方のみとめる唯一の絶対的なものである。

われわれは、ここで、このような見方が自然科学の今日の水準とまったく一致するかどうかという問題にたちいるにはおよばない。この自然科学は、地球そのものの存在にはおそらく終

りがあることを、だがそれに人間が住める状態にはかなり確実に終りがあることを、予言している。したがってそれは、人類の歴史にも、登り道だけでなく、降り道のあることをもみとめるものである。いずれにせよわれわれは、社会の歴史が下降しはじめる転換点へは、まだかなりへだたっている。それでわれわれは、ヘーゲルの哲学にむかって、その当時の自然科学がまだまったく議題にのぼせていなかったような題目の研究をもとめることはできない。

だが、ここでじっさいにいつておかなければならないことは、以上に展開したことは、ヘーゲルにあつては、これほどはつきりあらわれてはいない、ということである。以上の展開はヘーゲルの方法からの一つの必然的帰結なのであるが、彼自身は、それをこのように明確にはひきださなかった。しかもそれは、ヘーゲルが一つの体系をつくらなければならない、しかも哲学の体系というものは、これまで要求されてきたところでは、なんらかの種類の絶対的真理でおわらなければならないという、簡単な理由からであつた。だからヘーゲルは、とくにその『論理学』のなかで、こういう永遠の真理とは論理的な、したがってまた歴史的な、過程そのものにほかならないとどれほど強調していたにしても、彼自身、やはり、この過程になんらかの終末をつけずにはいられなかった。まさに彼自身の体系にどこかで終末をつけなければならなかったからである。彼はその『論理学』のなかでは、この終末をまた端初とすることができた。なぜなら、そこでは、その終末点たる絶対理念——それについて彼が絶対になにもいうことがで